

---

With You...

あやぽん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

With You…

### 【Nコード】

N4445A

### 【作者名】

あやぼん

### 【あらすじ】

ただ誰かに必要とされたかった。偽りの心。壊れてく自分。本当の自分が分からなくなる…自分の明日に夢も希望も無かった少女が本当に大切なものを見つける…心の変化を描いた物語です。

## プロローグ

ただ誰かに必要とされたかった。  
それだけなのに、なぜいつも空回りするの？

誰かが言った。

「ねえ。愛音って悩みとかないでしょ!？」

「いつもぼーっとしてるって言うか…。幸せそうだよね。」

「良いよね。愛音は。悩み事なさそうで。」

誰も分かってない…誰も知らない…。

本当は、私だって悩み事の一つや二つあるんだよ!…けれど…言いたいのにな、言えない…。

それは、自分が臆病すぎるから。

嫌われるのが嫌で、昔からいつも周りの意見に合わせて生きてきた。  
気が付けば、私は「意思のない他人の意見に流されやすいひと」になっ  
ていた。

こんな人と一緒にいても、おもしろ味が無いだろう。今だから思える。

でも…あの頃の私は、あれで必死だったんだ。

## 第一章

小学生の時。

私の通っていた小学校は生徒人数が少なく、クラスも一クラスしかなかった。

そんな小さなクラスでも当たり前の様に嫌われ者はいた。

昔から喘息がひどく、入院ばかりしていた私はなんとかクラスの輪に入ろうと

いつも、周りに気を使っていた。

ある日、仲の良かった友達から、何かがキツカケで

「本当は愛音：クラスの女子に嫌われててさ。…」  
と言われた。

一瞬、頭の中が真っ白になった。  
けれど、

「あ…！！そうだったの…！！」と笑って誤魔化した。

「やっぱり、愛音ってそんなの気にしないんだね…！！」と、  
うらやましがられたのを今でも覚えている。

本当は言葉に言い表せないほど、シヨックだった。

今まで、皆の気に障らない様に、接してきたのに  
「なぜ？」と言う疑問と同時に

クラスの子達に対する憎しみと  
自分に対する憎しみが生まれた。

六年生の時、環境の悪さを理由に引越した。

転校先では人に嫌われないよう、今までより必死になっている自分がいた。

心の何処かで人を信じられない思いも生まれた。

気が付けば、人の意見に流されてばかりで、何事にも興味の無い人間になっていた。

趣味もなければ、特技も無い。

ただ、言われたからする。と言う日々が続いてた。

卒業文集の「将来の夢」なんか、明日の楽しみも無い私に書ける事なんて無かった。

結局、内緒で友達に書いてもらった。

日々の生活はどんどん

偽りの心で塗り固められ、

本当の自分が何か判らなくなってきた。

## 中学

部活動も友達に誘われて、一緒に入った。

運動嫌いな私だったけれど、

柔道部に入ってた。

「愛音、柔道部入ったのー！？すごい意外なんだけどー！！！」

私自身もそう思う…。

吹奏楽部も誘われてたのに、なぜだろう？

今考えても思い出せない…。

けれど、

この選択は間違ってたか？と今でも思うよ。

あんなに大切な人達と出会えたんだから。



## 第二章

柔道部に入部してからと言うもの  
毎日が楽しかった。

先輩や、顧問の先生、皆に心が開けた気がしていた。  
そして、何よりかけがえの無い友達が出来た。

ドタバタと騒がしい足音が聞こえる。

「あいぼー！！！！」

ミイだ！！！！

ミイとは、部活を通して出会い、仲良くなった。

ミイの第一印象は、活発なイメージ。

第一印象の通りに活発で明るい子だった。

茶色の髪に大きな口。

自分の主張はハッキリ言える、そのうえ場の空気も読めるし本当に  
頼り甲斐がある。

けれど、少し臆病なところがあった。私達は少し、似たもの同士だ  
ったのかも知れない。

ミイ：「今日はアタシ、廊下で山野先輩と会ったヨー！！」

愛音：「ええー！！！！うそー！！！！？ミイだけズルいよー！！」

ミイ：「やっぱり、ワタクシの運命のヒトだわサ！！」

愛音：「絶対、ナイよー！！廊下で会ったくらいで……あ・り・え・  
な・いーッ！！！！」

その頃、私達は、同じ部活の一つ上の先輩、山野先輩に惹かれてた。  
部活の中でも一番と言っているほど、背が高くてスタイルも良く  
私達二人は、ほとんど一目惚れだった。

何事にも真剣な眼差し、  
爽やかな笑顔、  
本当に憧れの人だった。

私とミイは、毎日二人でウルサイくらい、山野先輩の話で盛り上がり時には鼻血を出したり…と、漫画さながらの楽しい毎日を送っていた。

しかし、ある日…ミイが集団リンチにあった…。  
しかも、私の目の前で…！！

本当は…事前に知っていたいながら、止めれなかった。  
いや…止めなかった。

やっぱり、人に嫌われるのが怖くて。

あの頃の私は、一番大切なものが何か判らなかった。  
それはきつと…いつも当たり前のようにすぐ側に居たから。

それからと言うものの、ミイはしばらく学校を休んだ。

私は、なんだか…いつも心に穴が開いている様な感じで。  
日々が経つにつれて、ミイの大切さを思い知った…。

過ちに気づいた私は、自分を憎んだ…。

自分を守る事に必死で、ミイを守れなかった…自分の不甲斐無さ。

後悔の日々が続いた…。

食事してる時、寝る前、夢の中でさえ後悔している自分がいた。  
その日も、憂鬱な気分で宿題に取り組んだ。



すると、またミイの事を思い出して、自分への怒りが込み上げてきた…。

自分への怒りを何処にぶつけていいのか判らなくなっていた私はひたすら泣いていた。そして、その頃から鉛筆やコンパスで自分自身を傷つけるようになった。

ミイが学校に来なくなってから、ちょうど一週間後。  
ミイから電話があった。

私は自分の過ちなど、全て本当の事を話し、  
「本当にごめんね…。」心から謝った…。

次の日、ミイはこんな私を許してくれた…。  
それと同時に悩み事など色んな事を話してくれるようになった。

あの頃の私は、毎日いきいきと輝いていた様に思える…。

### 第三章

〽一年生の冬。

いつもの様に私とミイは苦手な体育をサボって、  
体育館裏で早弁していた。

「あゝ！！！！また玉子焼きだよー！！？ミイ食べてよー！！」

「やだよー！！だって愛音のこの玉子焼きマズイもん…」

「っ！！ギヤアアアゝ！！！！？」

いきなり、ミイが叫んだ！！

「ゴキブリゝりゝ！！！！？」

ミイが叫びながら指さした：！！

そこには、長い触角をこちらに向け

今にも飛びかかってきそうなゴキブリがいた…。

「ぎゃあああゝッ！！！！！！！！」一瞬…凍りついたあと、慌てて

ゴキブリから離れた！！！！

その時、玉子焼きを落としたらしくゴキブリが、私の玉子焼きに…

！！

「×ゝ！！！！！！」二人共、言葉にならない言葉で叫んだ。

数日後…。

突然の事だった…。

親の仕事の都合でミイが転校になる。

最後の日。

その日は、めずらしく学校が昼に終わった。

ミイは内緒で引っ越しの終わった部屋に連れてってくれた。

いつも何処か落ち着きのなかったミイの部屋…。

それも、今は何も無い殺風景な部屋になってた。

ふたりで、弁当を開けた。

あ…。また玉子焼きだ…。

ミイは私の弁当を見てクスクスと笑って話した。

「また、玉子焼きだ…！　そっぴゃ、こないだ愛音の玉子焼きゴキブリに食べられたよね…」

私は、ぼーっと考え事をしていた…。

今は普通にミイといえるけど、もう今日で最後なんだよね…。

本当に、実感がわかなかった…。

「あ…！！ああ…！！ゴキブリ…！！」不意にミイが叫んだ…！！

え…？…！！ゴキ…！！？

『ギヤアアア…ッ…！！…！！…！！ゴキブリ…ッ…！！』見ても無いのに、私も思わず叫んだ…！！

半泣きになりながら叫んでいると

ミイは「嘘だよ。」と笑った。

「あ…！ごめん、ごめん…。だって、愛音ぼーとしすぎなんだもん…！」

ミイの言葉で我に返った私は深く深呼吸して、フツと壁を見上げた。  
「あ…！そっぴゃ、あそこの壁に山野先輩の拡大した写真はつたよね。」

と私は笑顔で話す。

「そっぴゃ…！！集合写真拡大して張ったんだよね…！！」ミイも笑顔で答える。

それから、しばらく無言が続いた…。

私は何か話そうと必死で思い浮かべようとしたが、なかなか思い浮かばない…。いつもなら、何でも話せるのに…。

そうしていると、いきなりミイが泣きだした…！！

「あいぼーと離れたく無いヨ…！」

「私もだよ……。」

ミイとのいくつもの思い出が頭の中を駆け巡り、自然と涙がこぼれ落ちていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4445a/>

---

With You...

2010年11月12日20時14分発行